

ラテン・アメリカ を知る事典

Cyclopedia of Latin America

監修……大貫良夫＋落合一泰＋国本伊代＋福嶋正徳＋松下洋

平凡社



ラテン・アメリカを知る事典

Cyclopedia of Latin America

平凡社

監修……………大貫良夫＋落合一泰＋国本伊代＋福嶋正徳＋松下洋



ラテン・アメリカを知る事典

1987年7月24日 初版第1刷発行



監修……………大貫良夫＋落合一泰＋国本伊代＋
福嶋正徳＋松下洋

発行者……………下中直也

発行所……………株式会社平凡社

郵便番号102

東京都千代田区三番町5

電話……………[03]265-0471[編集]

[03]265-0455[営業]

振替……………東京8-29639

印刷……………株式会社東京印書館

製本……………株式会社石津製本所

本文用紙……………十條製紙株式会社

クロス……………ダイニック株式会社

装丁……………中垣信夫

定価5500円

©Heibonsha Ltd. 1987 Printed in Japan

ISBN4-582-12609-X

落丁・乱丁本は読者サービス係までお送りください(送料小社負担)

はじめに

ラテン・アメリカは、多くの日本人にとって遠い国である。地球儀でみればアルゼンチンはたしかに日本の裏側に位置するのだから、距離的にいってその遠さは当然のことであるが、意識の面でも、ヨーロッパやアメリカ合衆国に比べればその地理的距離の何倍も遠いといえるだろう。

ラテン・アメリカがどのように一人ひとりの日本人の意識のなかに登場したかは、年齢、職業、趣味などによって実にさまざまである。ガルシア・マルケスの『百年の孤独』を読んでラテン・アメリカ文学の世界に眼をひらかれた人もあれば、サイモンとガーファングルの歌った『コンドルは飛んでいく』をきっかけにfolkloreにのめり込んでいった人も多いただろう。また、『早くマチュ・ピチュに行かなければ、大雨であの段々になった遺跡が流される夢を見てしまった』という考古学ファンもいる。商社マンにとっては、時に報道されるゲリラによる誘拐や銃撃事件は身近に起こりうる恐怖の出来事であるかもしれない。また、キューバ革命に胸を躍らせ、チェ・ゲバラのボリビアでの死に心を傷めた人びとも多かったはずである。

たぶん、一人ひとりにとってそれぞれの限定されたラテン・アメリカは存在するのだが、それは散らばったジグソー・パズルの1ピースのようで、ラテン・アメリカそのものは、いっこうに全体像を現してくれない。なんとかその1ピースを手掛りに、それと組み合わせられるピースを見つけたし、ラテン・アメリカについての認識の領域を拡大していきたい。それがこの事典のそもそもの出発点である。

幸い、今日の日本ではテレビから実にさまざまなラテン・アメリカに関する映像が茶の間に送り込まれているし、新聞でも『累積債務問題』などは報道されない週がないくらいである。こうしたマスコミに登場するラテン・アメリカをめぐるいろいろな語彙を手掛りに、次つぎに断片をつないでいくことができると思う。累積債務問題からラテン・アメリカの経済構造に、テオティワカンの太陽のピラミッドからメソアメリカ文明へ、folkloreからインディオの世界へ、リオのカーニバルからアフロ・アメリカ文化へ、アタカマ砂漠からもう一つの太平洋戦争へ、日本のブラジル移民からコーヒー産業の歴史へ、私たちはあの遠くて広いラテ

ン・アメリカを思いのままに駆けめぐることができるのではないだろうか。

ひるがえってみれば、この遠い大陸にも早くから日本人移民が渡って日系人社
会が定着しているし、今日では日本との経済的關係も広がり、貿易の面にとどま
らず、金融や直接投資にまで日本は深く関与している状況である。こうした〈国際
化〉の趨勢のもとで、この地域に関する私たちの認識を、断片から全体像へとつな
げることは急務であろう。また、しばしば日本は単一民族社会だといわれるのに
対して、ラテン・アメリカの社会は多くの民族が混血を重ねて形成されてきた点に
大きな特質があり、その文化の多様性と活力は私たち自身の文化に新鮮な刺激を
もたらす可能性をはらんでいる。

本事典はこのような思いをもとに企画されたものであり、ラテン・アメリカの自
然、文化、人びとの生活、歴史、政治、経済、社会などを総合的に理解できるよ
うに、国名をふくめた1100余項目からなる〈項目編〉と、全体を概観する〈地域編〉
ラテン・アメリカの2部から構成されている。とくに、私たち日本人が外からとら
えるラテン・アメリカの姿だけではなく、ラテン・アメリカの内なる声に注目し、ま
たラテン・アメリカと外の世界との関わりを展望する項目も設けるように努めた。

本事典の企画は、先に刊行した小社の〈大百科事典〉の構想と密接に関連してい
る。ラテン・アメリカ世界をとらえるために百科事典のなかに埋め込んだ項目の体
系と枠組を土台にしつつ、新たに大貫良夫・落合一泰・国本伊代・福嶋正徳・松下洋
の5人の委員にお願いして、項目選定、執筆者の推薦などを行っていただいた。こ
れら5氏のほかに、経済では細野昭雄、文学では野谷文昭、音楽では浜田滋郎の3
氏に多大のご協力をあおいだことを記して感謝の意を表したい。また、巻末の文
献案内の作成にあたっては、各方面の執筆者22氏のご協力をいただいた。

〈新大陸発見500周年〉を5年後にひかえたこの年に刊行される、日本で初めて
の総合的なラテン・アメリカ入門事典ともいえる本書が、未来の日本とラテン・ア
メリカの交流に役立つことを心から願うものである。

1987年6月 平凡社編集部

目次



はじめに	1
凡例	4
多様性と創造性の世界	5
イメージから対話へ	12

項目編「アーワ」19

アルゼンチン	42	チリ	245
アンティグア・バーブーダ	52	ドミニカ共和国	265
ウルグアイ	76	ドミニカ国	267
エクアドル	82	トリニダード・トバゴ	269
エルサルバドル	86	ニカラグア	277
ガイアナ	100	ハイチ	288
キューバ	129	パナマ	296
グアテマラ	142	バハマ	302
グレナダ	153	パラグアイ	303
コスタリカ	164	バルバドス	310
コロンビア	176	ブラジル	340
ジャマイカ	204	ベネズエラ	366
スリナム	219	ペリーズ	372
セントクリストファー・ネビス	223	ペルー	373
セントビンセントおよび		ボリビア	390
グレナディン諸島	224	ホンジュラス	397
セントルシア	225	メキシコ	419

「地域編」ラテン・アメリカ 473

総論/歴史/社会/宗教/政治/土地制度/
経済/日本とラテン・アメリカの経済関係

文献案内	500
各国便覧	510
索引	516
執筆者・図版協力者一覧	544

あ

か

さ

た

な

は

ま

や

ら

わ

地域

索引

凡例

1

本事典は、五十音配列による項目編と、ラテン・アメリカを概観した地域編とから成る。巻頭には、ラテン・アメリカへの誘いとして二つの序文を置いた。なお、30余の国名などはすべて項目編のなかに含まれている。

2

参照すべき関連項目を示す場合は、本文中では[△]、本文の末尾などではⒶのマークを項目に付した。ただし、序文では各ページの右欄に、文脈に関連する項目を例示した。

3

直送項目は■で送り先を示した。

例：米墨戦争■メキシコ・アメリカ戦争

4

スペイン語、ポルトガル語のカタカナ表記はおおむね別記の原則によっている。なお、ポルトガル語、英語などのv音は、ヴの文字は用いず、バ行音で表記した。ただし、〈ヴェリグ航空〉は日本での営業名に従って、例外とした。

5

アメリカ合衆国のことを、本文中では多くアメリカと略称した。

〔スペイン語〕

母音の上の´はアクセントの位置を示す。

c — e, i の前では[s], ほかの場合は[k]
Científicos シエンティフィコス, curare クラレ

g — e, i の前では[h], ほかの場合は[g]
Jorge ホルヘ, Galápagos ガラパゴス

gua, gue, gui — それぞれ[グア], [ゲ], [ギ]
Guatemala グアテマラ, Guevara ゲバラ,
Guillén ギリエン

h — つねに無音 hacienda アシエンダ

j — [h] Jívaro ヒバロ

ll — [ly], ただし南アメリカのうちアルゼンチン、チリなどでは[ジ], ほかの国々では[y]の場合もある。tortilla トルティリャ, Allende アジェンデ, Callao カヤオ

ñ — [ny] porteño ポルテーニョ

que, qui — それぞれ[ケ], [キ]

Queretaro ケレタロ, Quinquela Martín キンケーラ・マルティン

rr — [r] Sierra Nevada シエラ・ネバダ

x — [h][s][sh] México メヒコ, Taxco タスコ, Xochicalco ショチカルコ

y — [y] Ortega y Gasset オルテガ・イ・ガセット

z — [s] Zapoteco サポテコ

〔ポルトガル語〕

ão — [アン] São Paulo サン・パウロ

c — e, i の前では[s], ほかの場合は[k]
Francisco フランシスコ, Carlos カルロス

ç — [s] Bragança ブラガンサ

ch — [sh] Machado de Assis マシャード・デ・アシス

g — e, i の前で[j], ほかは[g]

Geral de Goiás ジェラル・デ・ゴイアス

gue, gui — それぞれ[ゲ], [ギ]

Miguel ミゲル, Guimarães ギマランイス

h — つねに無音 Henrique エンリケ

lh — [ly] Covilhã コピリャン

nh — [ny] Cunha クーニャ

õe — [オンイ] Camões カモンイス

x — [sh] Xingu シングー

ラテン・アメリカとは、メキシコ以南の中南米の大陸とカリブ海の島々から成る地域で、今日33の国家とアメリカ合衆国、イギリス、オランダ、フランスの属領に分かれている。この北回帰線の北側から南極大陸に近いところまで南北に長い地域が、まずもって自然環境の上での多様性に富むところであるというのは、容易に想像がつく。また、ひとつの国に赴いただけでも、その国を構成する国民の人種的特徴の差異に大きな幅があることに気づく。ラテン・アメリカ全体を見渡せば、その差異はもっと大きくなる。公用語として最も多く用いられているのはスペイン語であるが、ブラジルだけとはいえ使用人口の多いポルトガル語がつぎに位し、ほかに英語、フランス語、オランダ語がある。ところが実際に用いられているのはそれだけにとどまらず、正確な数すら不明なほど多数の言語がある。このことは、文化的・社会的慣習の異なる大小の集団が無数にあることの反映であるから、ラテン・アメリカは文化的多様性のきわめて大きなところといわざるをえない。ひとつの国家は、人種的、文化的に等質性の非常に高いひとつの国民から成るという、日本的な国家観が適用できない地域である。この文化的多様性の由縁は歴史に求められるが、その歴史といっても16世紀以後だけでなく、少なくとも紀元前の1000年か2000年のころにまでさかのぼる必要のある、たいへん根の深い歴史である。こうして、ラテン・アメリカとは、大きな自然と、先住民と、主としてヨーロッパとアフリカからの移住者とが相織りなして歴史を作りあげてきた世界といえる。

[本事典の関連する項目]

スペイン語
ポルトガル語

インディオ
移民

●異文化との邂逅と融合

カリブ海の地域は熱帯の海に点在する大小の島々から成り、先住民の祖先はベネズエラから、トウモロコシ、マニオク、ピーナッツなどを焼畑で作る農業をたずさえて渡ってきた。首長格の人物の威信は低いものではなかったが、配下の住民を永久に自分のもとにしばりつけておく制度は育たなかった。コロンブス以後ヨーロッパ人がやってきたとき、先住民はヨーロッパ人が当然としていた国家社会、支配者と被支配者の関係を十分に理解できなかった。ヨーロッパ人のもちこんできた病気にも免疫がなかった。人口の急減、ヨーロッパ人の使役からの逃亡などは、この南の島をサトウキビの生産地にしようとするヨーロッパ人の経済政策にとってはきわめて都合が悪く、その結果アフリカ人奴隷が労働力として連れてこられた。やがてスペイン、イギリス、フランス、オランダの植民地への分割が進むなかで、アフリカ人奴隷の子孫、混血児が増え、それぞれの植民地での文化が形を整えだした。また、島から島へと、文化が伝わることもあった。アフリカでも西部と中部の森林地帯が主たる奴隷の供給地であったから、カ

カリブ海
トウモロコシ
コンキスタドール
砂糖産業
奴隷制
混血

リブ海に運ばれた奴隷たちの間では、文化的な共通性も多かった。そのため、新しい環境で生みだされた文化要素は、急速に伝播し、島々で受容されやすかった。

太平洋のポリネシアで反乱のゆえに有名になったバウンティ号は、ブライ船長の率いるイギリスの船で、ポリネシアからパンノキの苗木をカリブ海に運ぼうとしていた。カリブ海の奴隷の食糧にする計画だったのである。ハワイでキャプテン・クックの死を目のあたりにしたことのあるブライは、太平洋航海のベテランである。反乱後、小さなボートでタヒチ島付近からインドネシア東部のチモール諸島まで漕ぎ渡ったブライは、イギリスに帰国後、ふたたびパンノキの移植を依頼され、今度は無事南米の南端をまわってカリブ海に苗木を届けた。食糧としてそれほどの役割は果たさなかったが、パンノキはカリブ海の島々から南米に入り、熱帯圏の地方に浸透していった。

パンノキ

リズム感に富むアフリカ人は、ドラム缶の楽器その他の打楽器を開発し、ヨーロッパ系の人々の音楽を吸収し、独特の音楽を生み出した。これもまた、島々にひろまり、メキシコから南米大陸にかけての広い地域に浸透した。グアラチャ、マンボ、チャチャチャ、メレンゲ、カリプソなど、新しいスタイルの音楽である。そして、つぎつぎと新しいリズム、メロディ、歌詞が生まれつつあり、また、音楽にはつねに新しい社会的・文化的意味も付与されてゆく。宗教の場において、あるいは政治の場において、音楽はつねに新鮮な役割を担っている。今日、日本でそれらを聴くわれわれには、カリブの音楽と聞こえる、ある種独特のスタイルを確立しているようにみえるが、日々つねに生みだされ、形成されている音楽でもある。

アフロ・アメリカ音楽

マンボ
チャチャチャ
メレンゲ
カリプソ

音楽

ポルトガル領であったブラジルでも、多数のアフリカ人が連れてこられた。ここでは、ポルトガル文化とアフリカ文化の融合が生じた。そしてそこへ、先住民の文化要素がとりこまれた。ブラジルの食事にはよくフェリーニャという、マニオクのしぼりかすを乾燥させた粗い粉末が利用されるが、これは、アマゾン川流域の焼畑農耕をする先住民の食糧として数千年の伝統をもつものである。一方、アフリカに根をもつ宗教儀礼とポルトガル人の宗教であるカトリック・キリスト教とが接触し、ブラジルという土地の社会的状況のなかで、さまざまな、いわゆるアフロ・ブラジルの宗教儀礼が形成された。それは聖書や仏典のような、文字化された教義をもたず、神のような聖なる存在も規定があいまいで、新しい神がこれからも生まれる可能性のある、開かれた体系である。アフロ・ブラジリアン・カルトは、ウンバンダ、シャンゴ、マクンバなどのカテゴリー分類を施されたものもある一方、どれともいえない種類のものや、新しいものがたくさんあり、いわばつねに生成されているという面がある。したがって、カテゴリーそのものすら、果たして成立するののかも問題である。

マニオク

アフロ・アメリカ文化

ウンバンダ

●内陸へ進む植民

アマゾン川、オリノコ川、ラ・プラタ川の流域の大森林地帯の植民地化は、ゆっくりと進んだ。先住民たちは大きな河川から追われてゆき、新しい伝染病や奴隷狩りで命を失う者が多かったが、一方でヨーロッパ人との混血者が増えていった。16世紀、ゴンサーロ・ピサロがエクアドルのキトを出て、ニッケイ(肉桂)の国を求めて東部の森林地帯に踏み入り、惨憺たる結果に終わったものの、オレリャーナのアマゾン川下降、そして〈発見〉とい

アマゾン[川]

オレリャーナ

う予想外の副産物ともいえる成果を生んだのが、征服史上興味深いエピソードであるならば、南のパラグアイ川の征服にもおもしろいエピソードがいくつもある。ドミンゴ・マルティネス・デ・イララのもとに結集したスペイン人は、パラグアイ川のほとりにアスンシオンを建設し、先住民のグアラニー族を支配して、スペインから隔絶した植民地生活を送ったことがある。当初はラ・プラタ川から西へ向かい、噂に聞いた黄金に富む国を征服する計画であったが、指揮官のメンドサは病気で帰国し、副官のアヨラスもインディオに殺され、イララが指揮をひきついたのである。アスンシオンでのスペイン人とグアラニー族の女性の間には混血児(メスティソ)が生まれていった。やがてイララは本来の計画の完遂を目指し、西方へと歩を進め、アンデス山脈のふもとに到着したところ、その住民からスペイン語であいさつされる。すでに噂の黄金の国は、太平洋から攻め入ったピサロらによって征服され、植民地とされ、ボリビアまで征服者間の領地分割が進んでいたのであった。以後、ペルー、ボリビア、パラグアイ川、ラ・プラタ川に交通路が確立し、パナマ経由で太平洋岸に至るルートと、ラ・プラタ川から南アンデスに至るルートが利用されるようになり、ラ・プラタ地方の開発が促進される。

パラグアイ川
イララ

グアラニー

エル・ドラド
ピサロ

ラ・プラタ諸国

ところが、ラ・プラタ川以南の土地は広々とした草原地帯で、先住民は移動性の高い狩猟民であった。土地を囲い、耕作や家畜飼育をするヨーロッパ人とは正反対の生活観をもっていた先住民は、ヨーロッパ人にとって、支配するのではなく、抹殺すべき対象となってしまった。そして、つぎつぎとヨーロッパ人が渡ってきた。こうして、パンパの草原には大規模な牧畜が根づき、馬に乗れない者は人間とはみなされないほどで、牛の群れを追うカウボーイ(ガウチョ)の生活様式が生まれる。それは、本国スペインにはない、新しい生活様式であった。

パンパ

ガウチョ

一方、内陸の森林地帯では、メスティソが主役となった。大きな河川は海との交通に便利であり、徐々に開発の拠点が作られていった。海岸部やアンデス地帯の開発に比べればはるかに遅れるが、19世紀後半のゴム需要は、アマゾン川流域の様相を大きく変えた。当時ゴムノキは野生のものしかなく、ゴム採取人は、夫婦単位で森の奥へと入っていった。もし、先住民の妨害があれば、武力でこれを除去することになった。ゴム景気はアマゾン川流域の先住民に甚大な被害をもたらしつつ、メスティソと近代文明の前線をジャングルの奥へ奥へと進めることになった。アマゾン川中流で、支流のネグロ川を少し入ったところのマナウスは大都市に成長し、豪華なオペラハウスまで建設された。

メスティソ

ゴム

マナウス

●厳しい自然の中に生きる知恵

しかしながら、アマゾン流域の自然は人間の支配下に入ってしまうほどひよわなものではない。今日でも、川に面したところどころに都市があるとはいえ、その数はごくわずかである。大部分はジャングルと水の世界であり、都市生活の便利さ、快適さはなく、虫、蚊、暑熱、豪雨、増水など、自然の猛威のもとに人間が生きている。近代文明の装備をもたずに入る文明人は、結局、先住民のすぐれた適応に学び、それに倣わなければならない。そこではメスティソや開拓者とインディオとの間に、たいした生活上の差異がなくなる。

アマゾニア

コロンビア東部のグアピアレ川を大きなカヌーで旅行したときのことで

ある。サン・ホセ・デ・グアビアレという小さな町に着いた日の午後、この地方の知事、医者、教会の神父、警官など10名余が、グアビアレ川沿岸に入植した開拓者の生活を視察し、現状を把握するキャンペーンに出かけるので、希望するなら同行してもよいと言われた。文字どおり、渡りに舟という次第で、言われるままにハンモックとそれ用の蚊帳を買い、大きな木をくりぬいてモーターをつけたカヌーに乗りこんだ。乾季のさかりで、水位は低く、兩岸は赤土の断崖を成し、蛇行する川の曲り角には白い砂州が張りだしていた。9日間の毎日が快晴で、朝から夕方まで、屋根もないカヌーの中にすわったまま、大勢のため体をのぼすこともできず、炎天下の川面を上下した。人々は、景色を論じ、冗談を言いあい、いろいろな人の噂話をし、ときに暑さと川旅の単調さに疲れて黙りこむが、鳥が飛んだり、川岸にカピバラを見たり、人家が現れれば、またひとしきりにぎやかになる。

ハンモック

川岸の崖の上に立つ家は、どれも掘立柱に丸木やあら削りの板の壁、ヤシの葉を葺いた屋根をもって、インディオの家とメスティソ開拓民との区別が外観からはつけにくい。2、3時間ごとに現れる人家を見つけては上陸する。インディオの集落であったり、開拓民の家であったりする。神父は話を聞き、知事は質問し、また答え、医者は病気や怪我の手当てをする。夕方でもあれば、軒先に各自ハンモックを吊って宿を借りることになる。カヌーに積んである食糧はほとんどないので、宿泊先の家で、マニオクのパン、料理用バナナ、塩のきいた干魚や薫製の魚などを分けてもらい、夕食や朝食とする。住民にとってこのような食糧だけは不足することがなく、訪問者には気前よく分けてくれる。家具といえるものはろくになく、懐中電灯の電池すら入手には時間がかかる。暗いランプの石油も、おそらくは不足がちであろう。開拓者はインディオと同様の畑作りをしてまず食物を確保し、川で魚をとる。ときには砂州でカメの卵を拾い集め、商人に売る。現金収入の道はたいへんに細い。トランジスターラジオとたまに通るカヌーが外界のニュース源である。ラジオは、住民のための特別のニュースを流す。同じ川筋に住む人々の消息や町での催しなどである。今回の知事一行のことも前もってニュースが流れていたようで、開拓者はたいがい家にいて、遠くに出かけている者はいなかった。グアビアレ川ばかりでなく、もっとへんぴなところにも入植している人間は少なからずいる。コロンビアという国の国民統合や、国民へのそして国民間のコミュニケーションの困難さをつくづくと思ったことである。だが、人々は楽家であり、素朴であり、荒々しい自然の中に生きぬく姿は頼もしい。持物や衣服の貧弱さは、そのような人々の人間としての価値をいささかも減ずるものではなく、むしろその価値を強調するようでさえあった。

コロンビア

●インディオと近代国家

ペルーのアンデス高地は、メキシコ、グアテマラと並んで、先住民が古くから国家もしくは国家的な社会を形成してきたところであった。スペイン人の征服と植民地支配の形式は、先住民インディオにとって、屈辱的ではあるが理解できない性質のものではなかった。集約的な農業は大きな人口を支えていて、スペイン人支配のもとでの人口激減の災厄をなんとか切り抜けることができた。メスティソが増加し、近代国家の国民の主流となったとはいえ、インディオは近代国家にとって政治的、経済的に無視できな

ペルー
アンデス地方

メスティソ
インディオ

い存在である。また、文化的にもインディオの存在と過去の伝統は大きな意味をもち、国民のアイデンティティの重要な基盤である。

ペルーでは、1968年に特権的オリガルキア(寡頭支配勢力)の体制打破を目指した軍事革命が起きたが、その政策の柱となった農業改革のシンボルマークは、スペインの植民地体制に対する反乱の指導者でインカ皇帝の血をひくトゥパック・アマルーの顔であった。トゥパック・アマルーの肖像は革命政府の発行した紙幣にまで描かれた。

オリガルキア
ペルー革命
農業改革
トゥパック・ア
マルー

インディオがペルーの政治や思想といった面で、ペルーの政治家や知識人に大きな影響を与えた歴史は、1968年の革命よりもはるか以前にさかのぼる。19世紀末のマヌエル・ゴンサレス・プラダは、インディオの尊厳をとりもどす必要性を力説した知識人であったし、インディオの国民化のための教育政策を実行に移したのはマヌエル・パルド大統領であった。その後の政治家、思想家、文学者、学者、芸術家がそれぞれの分野で独創的な政策や境地を生みだすときに、インディオ問題への取組みが大きな刺激になっているという例は少なくない。同じことは、テオティワカンからアステカに至る文化伝統をもつメキシコについてもいえる。

ゴンサレス・プラダ
インディヘニスム
思想
メキシコ

●社会のコンテクストを読む

ラテン・アメリカは、北アメリカに対比したとき、ひとつのまとまりとして対極の世界になる。今日の国際経済の状況からすれば、北アメリカの先進性に対して、後進性のレッテルがはられる。民主政治に対して独裁政治の温床とみられる。エドワード・ホールの《文化を超えて》などによれば、アメリカ合衆国のモノクロニックな時間観念に対して、ラテン・アメリカのそれはポリクロニックであり、人間関係は前者においてコンテクストが低く、後者においてコンテクストが高いという。

ラテン・アメリカ
[政治]

たとえば、公用車の運転手が用務の途中で親族や友人の家に寄って、頼まれた私物を届けたりすることがある。公務は私用とはっきりと区別すべきであるというのはコンテクストの低い社会であり、公務だけでなくファミリア(親族)やアミスタ(友人関係)という関係性も重ねあわせて個人があり、行動があるとするのはコンテクストの高い社会である。たしかに人間関係のみならず、諸制度の運用にあたっての人間の行動は、ラテン・アメリカではコンテクストが高いので、低い社会の人間にはコンテクストすなわち文脈を読みとることがむずかしい。先進社会で作りあげられた政治や経済の力学的理論が適用できないことがしばしばあるのも、そのせいである。

家族
アミーゴ
つきあい

ラジオ、テレビ、新聞、電話など先進国でのコミュニケーション度を測る基準も必ずしも適用できない。ペルーにきたある人類学者の話であるが、アンデス山中の、自動車も行けない小さな村を調査地と定めた。現地に行く前にリマでその出身者たちを探して事前に若干の聞き込みを行った。一週間ほどしてからバス、トラックと乗りついで、あとは歩いて目指す村に着いたところ、村人たちはすでにその人類学者の来ることを知っていたという。電話もなく、手紙でもおぼつかない山奥の村とリマとの間でも、コミュニケーションは発達しているのである。われわれは機械とか制度とかを遠隔地とのコミュニケーション手段と考える。しかし、人から人への伝達もまたコミュニケーションの手段であり、ペルーのみならず、ラテン・アメリカではごく一般的なのである。

マスコミ

輸出入や生産の統計数字だけでは、国内に出まわっている品物の量や流

通する金の額もわからない。統計の数字を出すいくつかの段階で、コンテクストの高さゆえのノイズやゆがみが加わる。さらに密貿易で出入りする物量もばかにならない。統計を作り発表する側も、また経済政策を実行する側も、そのようなことは知りぬいている。公式的な表面とは別に、裏面がそれに劣らず活動的なものであり、そのようなインフォーマル・セクターと呼ばれる裏面を、表の動きと結びつけてどうとらえ分析したらよいのか、政治や経済の専門家にとっては頭の痛い問題であろう。

また、たとえそのような分析が可能になったとしても、それで明らかになる部分とそうでない部分ができるにちがいない。コンテクストの高い社会という性質は今後も続くであろうから、ラテン・アメリカを理解することはなかなかむずかしいのである。そもそも、いずれの社会においてもコンテクストはあるのであって、高低のちがいなどほんとうにあるのかどうかも問題である。むしろ、高い低いといった区別よりも、どういうコンテクストがあるのか、そのことを理解するように努めることが先である。 ラテン・アメリカ[社会]

●多様性が秘める創造力

ラテン・アメリカは、北アメリカに対置させるとき、それとは異なるという意味でひとまとまりになるものの、中に入れば、実に多様なところである。これまで縷々述べてきたことは、その多様性の一端を示さんがためである。その多様性の底に、かなり広い地域において、イベリア半島の文化が基層として共通しているといつてよいのであるが、その共通したくラテン性^①は、今後しだいに薄れるか、変質してゆくことであろう。19世紀中ごろ以降、独立国家がつぎつぎと生まれてきたが、国家のちがいは国民の文化のちがいを作りだすのである。同じころにスペイン人に征服されたメキシコとペルーは、今日すでに目に見える形はもとより、思考のレベルにおいても、相互に異なる人間と文化をもつに至っている。インカ帝国の領土となっていて、征服後ひとつのスペイン副王領として長い間同一の植民地支配を受けていたところでも、ペルーとボリビアに分裂して以来、徐々に差異を大きくしている。

副王制

さらに国家は、その制度上の本性のゆえに、領土内の住民を国民として統合しようとする。それとともに国民文化が浸透してゆくのである。ラテン・アメリカ諸国の国民統合が進むにつれて、国民文化はますます独自性を強め、それとともにくラテン性^②は弱まってゆくことであろう。多様性はいつそう強化される。

一方、国民文化の形成は簡単ではない。長い時間がかかるであろう。これまでいくつかの地域の例を述べたように、各国とも、さまざまな文化的・民族的背景をもつ人々をかかえている。また、そのような背景がたいして役に立たないような、厳しい自然の中へ入りこんでゆく人々もいる。そのような状況は新しい矛盾や問題をつねに生みだすのである。たとえば、ペルーやエクアドル、あるいはメキシコなどのインディオの問題である。これとてもひとつにまとまった集団ではなく、言語、習慣を異にするいくつかのグループである。この人々は、それぞれの国の都市を中心としたところから生まれる国民文化の圧力に素直に屈するとは限らない。国民となることは肯んじても、文化の全面にわたって中心部に同化することには抵抗するであろう。そのような異文化を残しつつ国民統合を進めるにはどうしたらよいのか。この問題は、われわれ日本人には縁遠い性質のものであ

ろうが、ラテン・アメリカの多くの国にとっては毎日目前にしている問題である。

だが、難問は創造の契機でもある。新しい人間の存在様式が、このようなラテン・アメリカの状況のなかから生まれてくることであろう。ラテン・アメリカのあらゆるところで、これまでも、新しい文化、新しい生活様式が生みだされてきた。グアビアレ川の開拓者たちは、これから自分たちの生活様式を作るのである。ブラジルの町では、新しい世界観がつぎつぎと生まれている。ガウチョはいつのまにか姿を消すか、変貌した。カリブ海の一角にはレゲエ音楽が、コロンビアからはクンビアの音楽が生まれた。アンデスのフォルクローレは、新しい歌やグループをつぎつぎと生む。文学の世界も同じである。記述に、描写に、構想に、視点に、文学は旧世界の文学界に新風を吹きこんだ。政治のあり方、政治家の行動も欧米とは異なること、グレーム・グリーンが《トリホス将軍の死》などにみごとに描かれているとおりである。

レゲエ

フォルクローレ

ヌエバ・カンシ
オン

グリーン

ラテン・アメリカは、人間の社会や文化のあり方の多様性を如実に示して、自己中心的で視野の狭いわれわれ日本人の人間観なり社会観に強い反省を促してやまない。そのような異質性の強烈な体験を与えてくれるところとして、ラテン・アメリカはわれわれの関心を高めずにはおかないのである。

近年、地域研究と総称される分野が注目をあつめている。この場合の〈地域(エリア)〉とは、東南アジア、オセアニア、中近東、アフリカというように、ときには自然地理学的領域、ときには文化史的領域をさすこともあり、いささかあいまいな概念ではある。いずれにせよ、このような分野の台頭の背後には、西欧の政治的・経済的・文化的独占状態にかげりが見えはじめたいま、欧米一辺倒の姿勢は改められなければならない、西欧も含めた世界各地域を相対的に眺め、それぞれの文化的・政治的諸問題の理解に努めることが、世界全体の流れをつかみ、私たち自身をそのなかに位置づけるのに必要になってきたという事情がある。これは、私たちの〈世界〉が拡大した結果であり、また〈脱亜入欧〉に代表される日本の近代化を支えてきた考え方に対する反省でもある。

〈世界〉が広がったとはいえ、ラテン・アメリカが私たちの視野にのぼってきたのは遠い昔のことではない。日本からの移民、野口英世の活躍、古代遺跡、ラテン音楽などが思いうかぶとしても、それらが具体的で明確なラテン・アメリカ像に結びつくことはあまりない。中南米と呼ばれたりラテン・アメリカと呼ばれたりする地域とは、その実体とは、何だろうか。

日本人移民

●ラテン・アメリカ文化の見なおし

コロンブスの到着以来〈インディアス〉と呼ばれていた新大陸の一部にラテン・アメリカの名が冠されるようになったのは、スペインやポルトガルと同じくラテン文化を基盤とするフランスが、この地域に対する自国の権益を主張するためという政治的理由で、これをラテン・アメリカと唱えるようになった19世紀初めのことである。したがって、当初からそこにはラテン文化的領域というある統一性が設定されていた。

インディアス
新世界

イギリスの社会学者で日本研究家のロナルド・ドーアは、アジアでは言語と文化の多様性のために、アジア学者という呼称はありえず、タイ研究者、ベトナム専門家というようにエキスパート化するが、ラテン・アメリカの場合には、ボリビア学者、ペルー学者である以前にみなラテン・アメリカ研究者であるのが通例のようだと観察している。たしかに、ラテン・アメリカには、イベリア・キリスト教文化という〈征服文化〉が〈大伝統〉として存在する。そして、その一方に〈小伝統〉として地域ごとの文化があると考えられている。

ところで、〈文化〉とは何か。この言葉にはじめて人類学的な定義をくだしたのは、19世紀イギリスの人類学者エドワード・タイラーである。彼は、文化を〈知識、信仰、芸術、倫理、法律、慣習、そのほか社会の一員として人間が獲得した能力や習性を含む複合的全体〉と呼んだが、そこには、

文化を有機的に結合した安定的なものとみなす姿勢があった。だが、今日では、文化は部分部分が自己変化をとげるアメーバにたとえられることもあるほど、非固定的であり、拡散縮小もし、その広がり境界も厳密には定めがたいとされている。たとえば、メキシコ以南のアメリカ大陸とカリブ海地域の文化とされるラテン・アメリカ文化は、カリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコなどアメリカ合衆国西部にも広く見られる。プエルトリコ系の多いニューヨークやジャマイカからの移民の多いロンドンなどは、さしずめラテン・アメリカ文化の飛地である。いや、それらは英語化したラテン・アメリカ文化にすぎないと主張する純粋主義者がいるかもしれない。たしかに、テキサスのメキシコ料理はアメリカナイズされており、メキシコの片田舎の市場で出される料理の妙味はないかもしれない。しかし、〈純粋なラテン・アメリカ文化〉など、歴史上どこかに存在したことがあったらどうか。むしろ、そのようにステレオタイプ化されたラテン・アメリカのイメージに固執することは、私たちが透徹した目をもつことを妨げる。そればかりでなく、アマゾンの密林に住む先住民諸族までラテン・アメリカ人と呼んではばからないような、一種の文化的植民地主義に私たちを陥らせる危険性まではらんでいる。

ヒスパニック
料理

フランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースは、トーテム信仰を例にとり、部外者が犯しがちな概念化・一般化をつぎのように批判したことがある。トーテム信仰は、その特徴を世界の諸民族について比較分析し、その概念を練りあげている研究者には存在するのだが、それを担っている当の人々には実体がないのだ、と。ラテン・アメリカという概念についても、おなじことがいえるかもしれない。この名称は、その起源から今日まで、便宜的には用いられているが、その主体を十全に反映するものではない。とはいえ、私は新たな名称をここで提唱しようというのではない。いくら細分化した名称を付そうとも、それは名称と主体は一致するという分類学的信仰に支えられているにすぎない。むしろ、このエッセイでは、ラテン・アメリカ人自身によって、また非ラテン・アメリカ人によって、このラテン・アメリカという言葉が便宜的にせよ、いや便宜的であるからこそ使われてきたという背景について考えてみたい。

レヴィ・ストロース

そのためには、つぎのふたつの視点が必要であろう。そのひとつは、ラテン・アメリカの現実の諸相においてラテン・アメリカという概念がいかに実体化され、生きられているかを検討する視点である。これには、大伝統はどのような局面で意識され具体的行動として表出するのか、小伝統どうしはどのような関係にあるのか、また、大伝統と小伝統はいかなる関係で結ばれているのかの検討が含まれる。これをかりに(数多くあるうちのひとつの)内側の視点と呼ぶならば、いまひとつは、私たちを含む外部の目がラテン・アメリカに何を見てきたか、何を見ようとしてきたかを検討する視点である。

●ラテン・アメリカ——空想の一体性

ラテン・アメリカという概念は、アングロ・アメリカという概念との対比において政治的に出現することが多い。実際、そこに住む人々が〈ラテン・アメリカ〉を梃子に共同意識を形成するのは、本来はアングロ・アメリカと必ずしも一致しないのだが、アメリカ合衆国に対抗して、あるいは先進国一般に対して団結を見せる場合であることが少なくない。一国内でも、内

アメリカ

アメリカ合衆国

政が分裂気味のとき政府がアメリカ合衆国に矛先を向けると、その点において世論が一致し、一時的に政府攻撃が緩和されるということがしばしばある。もちろん前者のような動きも国際的な政治構造に規定されている。したがって状況によって流動的にならざるをえず、長年にわたり団結が維持されることは少ない。また、キューバやニカラグアなど社会主義国が他の国々と同一步調をとることはまれである。

アンデス共同市場のような地域の経済発展を目的とした組織の場合はどうだろうか。この場合も、ある程度の成果を挙げたものの、その停滞する現状は、共同体に参加した国々のあいだの資源力や発展にかなりの相違があり、利益を享受した国とそうでない国の差が大きかったことに起因していた。すなわち、第三世界という名のもとに結集したはずの国々のあいだに、新たな第三世界(これを第四世界と呼ぶこともある)の問題が隠されていたことが、かえって明らかになったのである。おなじ問題は、国内植民地主義というかたちで、一国内にも存在していることが指摘されている。

国による相違、国境の壁は、学問の世界にも見られる。分野にもよるだろうが、たとえばペルーの人類学を専門としメキシコに住むメキシコ人研究者を私は知らない。逆もまたいえるだろう。このように、自国しか研究対象としない局地主義(パロキアリズム)がラテン・アメリカの学界には強い。ドーアの先の発言は、欧米の研究者には適用できるかもしれないが、ラテン・アメリカ出身の研究者には、あまり妥当しない。

芸術の諸分野ではどうだろうか。邦訳もふえてきた文学の場合、各作家の活動を越えてラテン・アメリカ文学と呼びうるような実体は、ラテン・アメリカの内部にはないようである。1982年にノーベル文学賞を受賞したコロンビアのガブリエル・ガルシア・マルケスの作品は、たしかにラテン・アメリカの各国で多数の読者を獲得している。しかし、これはむしろ例外であろう。チリの作家ホセ・ドノソは、各国の作家が一堂に会する会議が1960年代初めにチリのコンセプションで開かれるまで、作家たちは、たがいに他国の文学状況をまったく知らない状態にあった、と語っている。その後、国際的な名声を博するにいたった作家も出ているが、出版事情も含め、局地性はなお存続している。

絵画についても、時代の様式、個人の様式は確立されても、ラテン・アメリカに共通したテーマや手法を発見するのは困難である。また、音楽にはラテン音楽という分野があるが、これは一般にアフリカ系リズム音楽をさし、いわゆるフォルクローレ音楽やクラシック音楽は含まない。アフリカ系音楽にしても、ヨルバ系キューバ音楽とバンツー系ブラジル音楽が大きく異なるのは、ソンとサンバを耳にすれば明らかだ。

ラテン・アメリカン・スタイルがもっとも喧伝されるのは、スポーツ、特にサッカーにおいてかもしれない。緻密な組立てと冷静なチーム・プレーを特徴とするヨーロッパ・スタイルなるものの対比において、個人プレーとリズム感と遊戯性がラテン・アメリカのサッカーの魅力といわれる。そして、それはプレーヤーたちの〈民族性〉に由来すると説明されることが多い。しかし、このラテン・アメリカ的文化、ラテン・アメリカ的民族性と一括して呼ばれるものこそ、外部の者が投影するイメージなのであり、ラテン・アメリカに汎在するものではない。個々の国を見ても、メキシコ文化、ブラジル文化、アルゼンチン文化と一括してすまずことができないほど、さまざまな部分文化を内包している。

ラテン・アメリカ[経済]
ラテン・アメリカ経済機構

従属論

人類学

歴史学

文学

ガルシア・マルケス

ドノソ

美術

音楽

フォルクローレ

ソン

サンバ

サッカー